

2010年 京都キリスト召団集会だより（抜粋）目次

- 2010年2月21日 「光・生命・愛」——ヨハネの第一の書——
2010年5月23日 「御霊に在って生きる」——ガラテヤ2・15～3・6、10～14
2010年6月20日 「福音は救を得させる神の力」
2010年7月25日 「わが義・わが愛」——ローマ書第5回——
2010年9月19日 「生命の御霊の法」——ローマ書第8回——

2011年 京都キリスト召団集会だより（抜粋）目次

- 2011年6月12日 「聖霊、愛の御霊」——聖霊降臨節集会——
2011年9月4日 「福音の原点」
2011年9月18日 「神の前には皆、生けるなり」
2011年9月25日 「常に祈りつつ目を覚しおれ」
2011年10月16日 「ゲッセマネの祈りと十字架上のキリスト」
2011年11月13日 「後のものを忘れ、前に向かいて」
2011年11月20日 「続・試練の中での希望」(1)
2011年12月4日 「続・試練の中での希望」(2)
2011年12月11日 「続・試練の中での希望」(3)
2011年12月18日 「続・試練の中での希望」(4)



光・生命・愛

——ヨハネの第一の書——

2010年2月21日

聖書朗読 ヨハネの第一の書第1章

2月第3日曜日、春の到来までに鴨川の整備をおえようとするのか、集会場の外は土砂運搬用の特殊車輛のキヤタピラの音が満ちていました。しかし、集会場の中は別世界です。先生、奥様の他13名が集まりました。聖日の朝、この集会場に來ますと、まことにただ主様の御臨在の場に集い、一つにされることを感じます。

奥田先生は、相変わらず超多忙の日を過ごしておられます。

「ナチュラルなあり方の中で、イエス・キリスト様の光を受ける。」

と言われた先生の御講筵は、イエス様の慈光溢れるものであり、同時に先生の信の特質が光を放っていました。それは、先生の中に静かにしみ込んだ聖霊の愛が一言一語に宿って滴りおちるようです。ヨハネ伝とヨハネ書簡による御講筵を、私達も魂にしみ込ませて聴きましよう。

御霊に在って生きる

2010年5月23日

聖書朗読 ガラテヤ書2章15節～3章6、10～14節

今日の聖霊降臨節集会には、多くの兄弟姉妹が集われました。最近の集会で奥田先生の語られる言葉を聞いていますと、主御自身が祈りの家に臨まれ、私たち一人一人に手を置いて「大丈夫だ。安かれ。」と慰めと励ましをくださっておられるように受け取られます。お忙しい先生は、格別の用意もなく語られるとのことですが、聖霊に導かれるままに語られる言葉には生命と力が宿り、その中からこの世と戦う一切の秘訣をいただける幸せに感謝せざるをえません。

語られた内容は、次のとおりです。生涯を通して本当に価値ある生き方は何かを示すためには、意志（願い）と聖霊の力（祈り心）を積み重ねて行くことが大事です。そのためには、律法（道徳的善行、修行）ではなく、聖霊のバプテスマを深め、聖霊の働きによつてこの世から解き放たれ、心を主に明け渡すことです。一時的な熱狂や奇跡ではなく、聖霊のみを頼りとして、「主よ、我が内にお宿り下さい」との地道な祈りが大事です。そのように苦勞して得た信仰は持続します。勞せずして得た奇跡だけでは信仰から簡単に離れます。人生



の戦いの中では、様々な試練に出会い、大きな重荷を引き受けさせられますが、主は「あなただから背負えます」と励まして下さいます。なぜなら、神の子である主御自身が十字架という一番損な役目を引き受けられてその模範を示されたのですから。どんな状況にあっても主を信頼して感謝することによってのみ平安があります。先生が最高裁で仕事をともにされた元長官から、翔君の生涯は、「知足感謝」の生き方であったと書かれた手紙を紹介されました。

福音は救を得させる神の力

2010年6月20日

聖書朗読 ローマ書第1章1-17節

梅雨に入りました。集会のテープにも、雨の音が入っているのかもしれませんが、「雨を降り注ぎ」という聖歌があるように、集会場を聖霊がすっぽりと包んで下さっていると、申したいと思います。

集会における奥田先生のご講筵は、今回から、「ローマ書講筵」です。ヨハネ伝の御講筵は、主イエス・キリスト様と御霊の一如、私どもの日々の生活の中における「主様の共在」を一貫して且つ熱く、語り出したものでした。先生の信の特質が鮮明になりました。パウロ書簡の中から、次に、ローマ書を選んで、新シリーズの御講演をスタートさせられました。

「神の義は福音の中に現れ」（ローマ書1章17節）

という一句において、「福音は全キリストである。」と言われました。主様は、その全生涯を私ども一人びとりの中に注ぎ込んで、今私どもに、新しい道を開示しようと、約束して下さいましたのだ、と響きました。私どもは、兄弟I S君を主様の御もとに送り、今、新しい信の中に主様と共に進んでいきます。



わが義・わが愛

——ローマ書第5回——

2010年7月25日

聖書朗読 ローマ書3章21～26節、5章1～11節

7月最後の聖日です。8月には久邇荘で特別集会が開催されます。これをクリスマスにたとえるなら、祈り待つ期間に入ったという日曜日です。非常に暑い一日でしたが、徳島からH姉が来て下さり、集会に喜びが増しました。新しい執務室にH姉が懸けられた「道」(東山魁夷作)、主様の道、遙かなれど一向なる道を歩む幸いをおぼえました。

奥田先生は民法学の先輩の追善会に出席のため、お昼前に出発ということ、集会の進行順が変わりました。御講筵は、ローマ書第5講「わが義・わが愛」です。この「わが」の「わ」は「神様」のこと。主キリスト様に具現した神様の義と愛が、ローマ書から溢れ出しました。ローマ書3章と5章、パウロの告白の背後にある、神の愛・神の義そのものなる主様の御生涯と十字架が浮かび上がりました。

生命の御霊の法

——ローマ書第8回——

2010年9月19日

聖書朗読 ローマ書8章1～12節

9月12日の聖日集会が休会となり、14日ぶりの集会でした。先生と16名の参会者で集会室が埋まりました。日付が替って間もない頃NK姉が天に召されたこと、O姉の御長男の御召天の報とともに、奥田先生の奥様が9月9日に御入院という御報告がまずありました。先生のロマ書の連続講筵が、折しも、第8章に入りました。語られる先生の祈りのようなロマ書講筵が展開され、霊に満ち、まことに厳粛な告白と聖言の一体的な集会になりました。キリスト・イエスに在る生命の御霊の法。主よ、今こそ働いて下さい。先生は

「キリストのみを見つめて生きていく。」

と言われました。キリストの愛の迫りが伝わって来ました。すべてを主様にお預けして、主様に抱きしめて戴く。現し身の中に主様が生きて、生かして下さいに違いありません。ひとりひとり、みんな、祈りましょう。



聖霊、愛の御霊

——聖霊降臨節集会——

2011年6月12日

聖書朗読 使徒行伝1章1～14節、2章1～4節

2011年は復活節が4月下旬であったため、聖霊降臨節を梅雨の季節に迎えることになりました。聖霊は水に譬えられますが、鴨川に豊かな水が流れる聖日に、奥田先生の御宅の二階がいつぱいになる数の兄弟姉妹が集い、聖霊降臨節集会が開かれました。

「私達に最も親しく近い主様とは、福音書に記述された地

上の主様でも、天上の主様でもなく、御霊の主様なのです。」

奥田先生の御講筵はこのメッセージで始まりました。御講筵「聖霊、愛の御霊」では、ヨハネ伝(14～16章)、エペソ書、コリント後書・前書、ローマ書(8章)、テモテ後書の中から聖霊の働き、聖霊の愛の共在の御言が溢れ出しました。主様が、すなわち主様の御霊・御霊なる主様が、

「私はお前と偕に居る。一つだ。」

という事態を作り出して下さっている。奥田先生の此頃の御講筵を貫通しているのは「主様の共在」であり、先生は「手触りて」ある主様(ヨハネ一書1章1節)を告白しておられるのです。



福音の原点

2011年9月4日

聖書朗読 ガラテヤ書1章4節、4章4〜7節

この日の集会は、夏季福音特別集会に対する感謝集会の意味も込めて、奥田先生は「福音の原点」と題して講筵され、京都キリスト召団としての福音の受け取り方とは如何なるものであるかを明らかにされました。

それは、パウロの福音伝道によってキリストの聖霊を恵み豊かに受け取ることになったガラテヤの人々を引き合いに、

「神・キリストに受け入れられたり喜ばれたりすること（キリストの聖霊に満たされること。我々にとってそれは本当の心の平安や生きる喜びになる）は、我々の側の人間的立派さや何かを成し遂げたから獲得できるというものではなく、ひたすらキリストの側からの絶対恩寵によるものである」

ということでした。

奥田先生は、ローマ書3章20節を引いて、

「立派な行いや道徳的規範によって神・キリストに受け入れられたいと考える方は、その道を行かれればよいけれども私は同調しない」

と語られ、福音とはどこまでもキリストの側からの恵みであることを強調された。

福音書における放蕩息子の譬え話でも明らかにされている通り、キリストは我々一人一人をかけがえない存在として気にかけて愛しておられる。そして、我々がキリストの恵みに気づいて故郷（キリストのもと）に帰ってくることを待ち望んでおられる。

パウロは、神に受け入れられるために、律法の義（道徳的規律や人間的立派さ）を追求すれば人間には罪の自覚しか生じないとした（なぜなら生まれながらの人は規律や道徳を喜びをもって満たすことはできないから）。従って、自己義認（立派な行いをしていることを理由に、自分は正しい人間であり神に受け入れられる資格があると考えること）は、無自覚的な罪とならざるを得ない。

自己義認の反対がキリストの福音（キリストからの恵み、そしてそれに感謝してキリストの御心を素直に受け取ることができる信仰）。我々は、知恵も義も聖もキリストから頂いた（コリント前書）。我々に誇るものがあるとすれば、キリストにすがっている、すがることが自分の心根しかない。



神の前には皆、生けるなり

2011年9月18日

聖書朗読 ルカ伝20章27〜40節

9月半ばというのに残暑が厳しい。それでも、今朝、草むらの中に彼岸花が茎を伸ばしてひっそりと咲いていた。秋近しというべきか。

今日の講筵で奥田先生からルカ伝20章を中心に語っていただいた。その中でも27節から40節までの次のような内容が、特に私の心に響いた。

主様は、

「神は死にたる者の神にあらず、生ける者の神なり。神の前には皆生けるなり」

(ルカ伝20章38節)

と、このことに関して自ら力強く語られている。私達は、主キリストとの出会いをおしえて新たな「いのち」を注がれ、

「我は復活なり、生命なり、我を信ずる者は死ぬとも生きん。おおよそ生き

て我を信ずる者は、永遠に死なざるべし。」(ヨハネ伝11章25〜26節)

の次元をいただいた。主様を日々食らい飲むことにより、この地上において真に生きることができる。しかし、地上での人の「いのち」は限りがあり、愛する者、近しい者を「かの世」に送る悲しい時が来る。

でも主様は、人(霊止)は決してこの地上だけの存在ではなく、神の人にはこの世を去る

とき「復活のいのち」を与えて、「かの世」で霊体となつて「生ける」ことをはつきりと示

しておられる。主は、その復活の子は神の子供であり、かの世にあつて主様の働き人として活き活きと働くことになるのだと自ら明らかにされている。このことは、かの世に近い人を送った祈りの人にとって、深い慰めである。

また先生は私達に、ガラテヤ書2章20節の

「我キリストとともに十字架につけられたり。最早われ生くるにあらず、キリ

スト我が内に在りて生くるなり。」

を、生活の中心に据えて生きてくださいとも話された。

今年は大きな災害が各地をおそっている。今日の講筵は、災害に遭われた家族にとって、慰め深いメッセージだと感じた。



常に祈りつつ目を覚しおれ

——ルカ21章——

2011年9月25日

聖書朗読 ルカ福音書21章1～9、29～36節

暑さ寒さも彼岸までの言葉どおりに暑かった夏も終わりに近づき、ようやく秋も近くなりました。18回目をむかえたルカ伝の講筵も終盤に入り、次第に信仰の核心が何かが開示されてきました。

貧しい寡婦^{やもめ}が捧げたレプタ2つの記事から、キリストは、形ではなく心を見ておられることを学ばされました。

主が寡婦の信仰を良しとされたのは、彼女が結果の成否を計算することなく、全存在を主に預けて捧げたからです。

主は、我々に100%を求められる。しかし、我々には残しておきたいものがある。この誘惑を断ち切って、主に全托して導いていただくと、主は我々の全存在を受け取られて、生涯を守り抜くと約束されます。一日一日を全力で主に捧げる生き方をすると、霊的に成長して内面から強められ、試練に遇つてもくじけないようになります。

日常生活においては、神様第一となれるかが常に問われていますが、これは、人間の努力やいわゆる精進でできるものではありません。

「われ主とともに十字架せられたり。もはや我生くるに非ず」

を心に念じて主に全托していかないと、御心になう生き方はできないのです。レプタ2つの記事にみる寡婦の無私の姿は、クリスチャンにとって生涯の課題です。

集会をスカイプで見えていただくことにしていましたが、希望者が多く、スカイプでは対応できないので、M兄のご努力によりユーストリームによる配信に変更しました。これなら、集会と同時刻でなくても、後日見てもらうことができます。ただし、集会を一般公開することは適切ではないので、パスワードを設定して真に希望される方だけが閲覧できるようになっています。ご希望の方は、集会宛てにご連絡ください。アドレスは kyotoshodan@almond.ocn.ne.jp



ゲッセマネの祈りと十字架上のキリスト

——ルカ22～23章——

2011年10月16日

聖書朗読 ルカ福音書23章26、32～49節

この日の集会は、朝から集会場の玄関先でK君とHさん、K兄弟が皆を出迎えてくださいました。まるで、主様が迎えに来てくださったかのようで、とても清々しい気持ちになりました。

集会の始まる前、今年3月11日の東北地方大震災を背景に、奥田先生がNHKラジオ等で語られたことを文字化した冊子「試練の中での希望」が配られました。

奥田先生は、「ゲッセマネの祈りと十字架上のキリスト」と題した御講筵の中で、私たちにいくつものメッセージを伝えてくださいました。

「神への最高の贈り物は自分の意志を捧げ切ること」（ヒルティの言葉）

自力でキリストにしがみついて天に昇るのではなく、キリストの愛に圧倒され、キリストと一つになって、キリストに抱かれて、天に昇る。例えて言うなら、キリストに抱かれることは、気球の籠に乗るようなもの（言いたいことは、自力で籠（キリスト）にぶら下がるのは無理があるということ）。

人の弱さをとらえて

「お前はダメだ、ダメだ」

と否定する霊（サタン）の反対が、

「お前は大丈夫。わたしが担っている。お前の全責任を負っている」

と言ってくださいるキリストの霊。キリストはこう言ってくださるために、我々を助けてくださるために、十字架にかかってくださった。

聖書の登場人物になりきって聖書を読むと、その世界の中に入っていける。聖書には時代や異国の出来ごとという制約があるため、それをクリアするために、当時のことを教えてくれる解説書は必要になるが、それはあくまでも聖書をより良く理解し、身読するための補助である。

様々な試練は、完全な光の子に成長していくためのもの。だから忍耐できる。



後のものを忘れ、前に向かい

——ピリピ2章13節——

2011年11月13日

聖書朗読 ピリピ書2章

15節、3章13〜14節、4章4〜7節

この日の司会の証言では、11月6日の奥田先生の御講筵「大麦パン5つと小さな魚2つ」に感動したことをお伝えしました。この世の能力のある人たちと渡り合つて、負けないで生きて行くためには、自分の持つている物(仕事の成果)をキリストに捧げて、主がそれを何倍何十倍にも用いてくださることを信じていくしかないと考えようになったことを感話しました。

この日の「後のものを忘れ、前に向かい」——ピリピ2章13節——と題した御講筵も、先生の苦い実体験から語られました。先生は、「聖書が今の自分にどのように語りかけてきているのか」という読み方が重要だと話されました。

この日先生が語られたメッセージの中で印象深いものをお伝えいたします。

大人自身が本当の生きる価値を求め、後になる程、輝いていく生き方をする事で、子ども達の希望の光になることが、青少年教育に必要ではないか。

後のものを忘れ、前に向かい(ピリピ3章13節)：自分の至らなさを反省はしても、自分を責め続けるのは止めて、ひたすらキリストに向かつて走る。

責任ある社会生活を真剣に取り組んでいたら、内なる太陽である救い主キリストがどうしても必要になってくる。

クリスチャンの特権は、試練の時にも逃れの道が備えられていること。

困難が臨んでくるのは、鍛えられるチャンス。だから、困難を避けようとするな。避ければ、この世で生きていけない。(ヒルティ)

神に祈りをなし、願いをなし、感謝をする。↓平安が訪れる。

主への畏れは知恵の初め。それを行う者はみな悟りを得る。(詩編111・10) ↓この世の仕事と矛盾しない。クリスチャンは暗き世にあつても輝く存在。

神に向かう時は、感謝・讃美から始まる(いかなる時もその心を注ぎ出し、自分のゴタゴタと絶縁する)。↓失敗やマイナスもバネにして祈り(感謝・讃美)に変換する。↓鷲のように新たにされる。(詩編103・5)

人に対し、出来る限りの責任を果たし、誠意を尽くしたなら、キリストの無条件の赦し(お前は反省してる。もうええんや。ワシに任せとけ)に任せる。



続・試練の中での希望 (1)

— イザヤ書51～55章 —

2011年11月20日

聖書朗読 イザヤ書51章1～16節

この10月に私たちは、東日本大震災の被災地に思いをはせて作られた小冊子「試練の中での希望」をいただいた。復興に向けての努力が続けられているが、道は遠い。

本日の講筵は、イザヤ書の中から私たちに励ましとなる御言を拾い出し、これをキリストの光で見ているようにするもので、併せて、被災地の方へのメッセージの思いも込められている。奥田先生は、まず、イザヤ書40章から話し出された。以下、心に残ったことを心に記載する。

『慰めよ。慰めよ。私の民を』と、あなた方の神は仰せられる。(民に)優しく語りかけよ。その労苦は終わりに……。主の道を整えよ。荒地で、私たちの

神のために、大路を平らにせよ。」(イザヤ書40章1～3節 新改訳)

なぐさめ

慰安の主キリストは、苦難の中にある者に、「労苦は終わった」とねぎらいの言葉を述べ、慰めの霊を与えてくださる。そして、もう一度魂の原点に戻ろうよ、真の心の貧しさに立ち帰ろうよと呼びかける。

「主を待ち望むものは新なる力を得ん。驚のごとく翼をはりて上らん。走れ

ども疲れず歩めども倦まざるべし。」(イザヤ書40章31節 文語訳)

この箇所を先生は次のように語られた。

「主を待ち望む者は、新たな御霊の力をいただきます。御霊には生命があり、病にも打ち勝ち乗り越える力があります。皆さん自分の現状にとらわれないで、気持ちは天に向かって飛びかけましょう。」

続いて先生はイザヤ書51章～55章までの御言を取り次いでくださった。51章に

「我が義は近づき我が救いはすでに出現したり。」

「我が義はとこしえに存え、我が救い、万代におよぶべし。」

とある。先生は、

「人を救わんとする主キリストの御意の現われが『義』であり、私たちを救い上げてまつとうな者にするのが主の心です。」

と話され、イザヤ書51章11節の御言を、東北の方に送られた。

今日は風邪のため欠席した者が数人あったものの、参会した者は主の熱気に、心も体も温かくされた。



続・試練の中での希望（2）

——イザヤ書56～60章——

2011年12月4日

聖書朗読 イザヤ書56章1～8節

前回からイザヤ書を通して「続・試練の中での希望」という講筵が始まっています。講筵の内容は、東日本大震災という未曾有の出来事による喪失感や、政治経済の閉塞状況が日本全体を覆う中で、それを打ち破って真の再生を目指すための道を示すほどの深いものです。先生が主から、日本の未来は、人から出るものに頼るのではなく、主に依り頼むしかないという啓示を受けられ、それを語られているのではないかと思わされます。

日本は、戦争、災害などの様々な試練に出会ってきたが、その後、立ち上がるときに、向かっていく目標がなく、結局は人間中心の復興と繁栄を追求してきました。しかし、主は、人間中心の外的な繁栄を求めることから方向転換して、心碎けて主の前にひれ伏すという内的な再生を求めておられます。何時いかなる時にも、主の前に身を投げ出し、主とともに日々の業を行っていく。そこから出てくる答えがどのようなものであっても、主はそれを受けとり、最善をなさせてくださいます。主は、どのような状況にあっても、

「私が内にあつて守っているから、あなたは平安である。」

と励まし、勝利を約束されています。主に全てを委ねた人に対し、地上の生命を超えた守りを与えられ、

「大丈夫、雄々しく生きなさい。」

と導かれます。そのような希望があるからこそ、試練を突破できるのです。



続・試練の中での希望 (3)

——イザヤ書61～64章——

2011年12月11日

12月も半ばに入り、聖書朗読 イザヤ書61章1～3節、63章7～9節
寒さが身にこたえるようになってきた。本年の集会も2回を残すのみとなった。

集会のはじめに召団讃歌A 29番「十字架のもと」を歌ったが、奥田先生は歌詞の中で一番心に残ったところとして、

「わが主イエスよ わがすべてよ」

をあげられた。先生は、

「皆さん、本気でこのことを告白していますか。これをはつきりと告白出来る魂は幸いで、これが本当のクリスチャンです。小さく告白する者には小さく、大きく大胆に告白する者には大きく主が入ってくださいます。主は、この告白をする者に必要なものを備えてくださるのです。」

と話された。

講筵ではイザヤ書61章から64章までのきらめく御言葉を中心に学んだ。以下、その一端を記す。主に愛され抱かれた私達の口から出るのは、まず、喜びと感謝である。

「われキリストを大いに喜び、わが靈魂^{たましひ}は、わがキリストを楽しまん。そは我に救いの衣を着せ義の外服^{うわぎ}をまわせて、新郎が冠^{にいはこ}をいただき、新婦が玉こがねの飾りを付けるが如くなしたまえばなり。」(イザヤ書61章10節)

主の恵みが先にあり、その恵みを素直に受け取るところに喜びがわく。試練の中にある兄弟姉妹に、この主にある祝福の御言葉を贈りたい。

「彼らが艱難^{なやみ}のときはキリストも悩み給うて、その面前^{みまへ}の使いをもて彼らを救い、その愛と憐憫^{あわれみ}とによりて彼らを贖^{あがな}い、……常に彼らを抱きたまえり。」(イザヤ書63章9節)

この御言葉も深い慰めである。主キリストが私達と共にあり、その平安の霊で私達を支えてくださる。そして主は私達に

「二人で思い悩まなくてもいいよ、私(キリスト)に立ち帰り、私の愛の中にいつも居なさい。」

と呼び掛けておられる。私達は、このキリストのハグ(抱きしめ)の中に、幼子^{おきなご}のように身をゆだねていくだけである。

クリスマス集会が近づいた。今年日本は厳しい自然災害に見舞われた。この試練の中にあつて、主は私達に、どんなクリスマスメッセージをくださるか楽しみになっている。



続・試練の中での希望（4）

——イザヤ書65～66章——

2011年12月18日

聖書朗読 イザヤ書65章17～25節

この日の司会での証言で、食前に

「主様のためにしっかりとよく噛んで食べさせてください。主様のために働かせてください。自分のものは何もありません。自分の持っているものは全て主に捧げていきます。主様が豊かにお使いください」

と祈るようになったことをお伝えしました。奥田先生が、「キリストのため、は奥義です」と言ってくださったので、この方向性で成長していきたいと思えます。

この日の御講筵で奥田先生は、イザヤ書65～66章を通して、主を信じる者（当時はイザヤ、今は我々も）に主が予言されたことを伝えてくださり、その予言を解説してくれているエペソ書のことを伝えてくださいました。イザヤ書では、主に従う者の現実

「彼らは家を建てて、それに住み、ぶどう畑を作って、その実を食べる」（イザヤ65・21）

という平和の日常であり、人間が救われる（キリストの心を心とする）ことによって、

「おおかみと小羊とは共に食らい、ししは牛のようにわらを食らい」（イザヤ65・25、11・6）

という形で自然界もまた救われるというこの世でのビジョン・希望が示されている。聖書のこのようにった箇所を日本の震災復興の要にしてみたい。

神の怒りを、キリストが十字架で一身に受けられた。（イザヤ12・1～6）

エペソ書1章では、単なる我慢・忍耐ではない、主にある者の希望や力強さが語られている。だから、我々は絶対にへこたれずに、

「外なる人は破るれども、内なる人は日々に新たなり」

の現実を生きることができる。このような人たちが集う場が集会。

エペソ2章8節～10節。我々が救われたのは、実に、恵みにより、信仰（恵みを恵みとして頂く（食べる）ことを指す）による。それは、我々から出たものではなく、神の賜物である。決して行いによるのではない。それは、だれも誇ることがないためである。わたしたちは神の作品であって、良い行いをするようにと、キリスト・イエスにあつて造られた。↓主にありては自信あり。キリストはわたしたちの平和であつて、様々な対立的関係（神と人、戒めに満ちた律法と生まれながらの人、イスラエル人と異邦人）を十字架によって無くしてくださった。（エペソ2・14）

